

「外国文学」講義録（4）

徳 座 晃 子

VI. 講義「アメリカ文学史資料」

目 次

序

1. 植民地時代の文学（1600年初期から1730年頃）
2. 独立戦争前（1730年から戦争まで）
3. アメリカ文学の創世記（独立戦争1755年—1783年から1820年代）
4. 1830年代から1860年代（南北戦争直前）
5. 1860年代から19世紀末まで（南北戦争終結とアメリカ資本主義の興隆）
6. 19世紀末から20世紀初頭（1890年代—1910年代）
7. 1920年代の作家たち
8. 1930年代から1940年代
9. 第二次世界大戦後の文学（1940年代後半から1950年代）
10. 1960年代から1970年代
11. 1970年代以降

序

本校では、文学を専攻した先生方が、順番に、自分の研究分野を一学年間、全学部からの履修希望者に講義する。在職中、順番がなかなかまわってこない。そこで、ゼミで文学の諸研究のポイントを教授する。私の場合、大変幸いなことに、退職一年前2002-3年度に、担当の機会がまわってきた。それまでに、英米文学作品研究、古典修辞学の現在に至るまでの伝統の研究、現在のコミュニケーション研究と、順に勉強を積み上げてきた。どちらかといえば社会科学系の学生諸君に、文学研究もなかなか面白い分野であることを、少しでも体得してもらおう、卒業後も長く、折にふれて、文学作品に接してもらいたい、と願い、わずか数週間20数回前後の授業でいくつかのヒントを提供できる方法を考えた。その結果、お勤

「外国文学」講義録 (4)

め先の昼休みに、街かど図書館においてある、毎年発行されている『文芸年鑑』（日本文芸家協会編）に今のうちに親しんでもらうことを思いついた。日本をはじめ、バラツキはあるが、世界のいろいろな国の文学作品の流れがわかる。自分が一番関心をもつ国、時代、作者たちに接するヒントがつかめる。このような学生諸君への思いやりの結果が、以下の講義録となった。

平成 14 年 9 月 「2002 年度『外国文学』講義録 (1) 1996 年から 2000 年までのイギリス文学 (4 月) 1996 年から 2000 年までのアメリカ文学 (5 月)」東京経済大学, 「人文自然科学論集」第 114 号, pp. 63-114。

平成 14 年 9 月 「2002 年度『外国文学』講義録 (2) 1991 年から 1995 年までのイギリス文学 (6 月) 1991 年から 1995 年までのアメリカ文学 (7 月)」東京経済大学, 「人文自然科学論集」第 115 号, pp. 111-159。

平成 16 年 2 月 『『外国文学』講義録 (3) 『エディパス王』(2002 年 9 月)』・「後記 私の歩み」東京経済大学, 「人文自然科学論集」第 117 号, pp. 57-134。

平成 15 年 (2003 年) 10 月から、翌年 1 月の最終講義までの期間、アメリカ文学初期から以下の項目で、大至急の進み方をして、授業の都度、以下の順序で授業原稿コピーを配布していった—

1. イギリスの清教徒
2. 植民地形成
3. 神政政治を支えた人①
4. 神政政治を支えた人②
5. 宗教復興と啓蒙主義
6. アメリカ文学の創世紀, ここで時間切れになった。

本校 AV ルームにある放送大学ビデオ教材, 人文科学・芸術分野の「アメリカ合衆国史シリーズ」の紹介と言及も行った。そして今回の, 「アメリカ文学史資料」を最終授業で配布し, 2002 学年度「外国文学」講義を終了した。

「人文自然科学論集」No. 117 に記載しきれなかった「後記—私の歩み」とマルティン・ルーサー・キング, Jr. 博士の“I have a dream”は, 後の号に載せさせていただく。

1. 植民地時代の文学 (1600 年初期から 1730 年頃)

ジョン・スミス著『ヴァージニアとイングランドとサマー諸島の一般史』。ウィリアム・ブ

ラッドフォード『ブリマス植民地』。ブラッドフォードは初代ブリマス植民地の総督。ジョン・ウィンスロップ『ニューイングランドの歴史』。ウィンスロップは初代マサチューセッツ植民地総督、以後何回か総督に選ばれる。コットン・マザー『アメリカにおけるキリストの大いなる御業ニューイングランド教会史』。コットンは初期マサチューセッツ植民地の神政政治を精神的、思想的に支えた。マザー一家の三代目。神政政治が揺らぎかけているのを支えようと努めた。マイケル・ウィグルワース『最後の審判の日』。マサチューセッツ辺地の牧師。サミュエル・シュール『日記』。公務や実業につきながら綴ったもの。当時の記録として貴重。アン・ブラッドストリート『第十番目の詩神』。女性詩人で敬虔な信仰家。ジョナサン・エドワーズ『意思自由論』。宗教家。18世紀アメリカ精神を代表する人物の一人。ジョン・ウールマン『私記』。物質的な奢りや贅沢を嫌い、自活しながら一生を伝道に捧げる。

2. 独立戦争前（1730年から戦争まで）

ベンジャミン・フランクリン『貧しきリチャードの暦』、『自叙伝』。零細な事業から身を起こし、実業で成功する。公共のために働き、政界に進出、アメリカ独立のために尽くした。18世紀の啓蒙主義的合理的思想を身につけた、当時を代表する知識人。ジョン・ド・クレヴクール『アメリカ農夫便り』。フランス人。アメリカ女性と結婚、農園を営みながら各地をまわった見聞を手紙形式でまとめた。フィリップ・フレノー『サンタクルズの美しい人』など。「アメリカ独立革命の詩人」としてもはやされた。後のロマン主義詩の先達となった。トマス・ジェファスン『ヴァージニア覚書』。アレキサンダー・ハミルトン、ベンジャミン・フランクリンらとともに、独立宣言を起草する。第三代大統領となる。

3. アメリカ文学の創世紀（独立戦争 1755年—1783年から 1820年代）

チャールズ・ブロックデン・ブラウン『ウィーランド』、『エドガー・ハントレー』など。イギリスのゴシック・ロマンスにアメリカ固有の素材—インディアンや西部の荒野を怪奇な舞台に変えて、独自の物語の道を開く。ワシントン・アーヴィング『スケッチブック』ほか。ヨーロッパ滞在が長く、その見聞を生かし、新世界たるアメリカ開拓時代の話題に、旧世界の文学的趣向を添えた作品を創作した。当時の国家的作家。ウィリアム・カレン・ブライアント詩集『ブライアント詩作集』、詩「死生観」など。アメリカの詩を、イギリス18世紀風の形から、新しい精神のフロンティアをはっきり反映する、素朴さと喜びを表現する詩に変化させた。ジェームズ・フェニモア・クーパー 革脚絆物語—『鹿猟師』、『モヒカン賊最後の

砦』、『道を開く者』、『開拓者』、『大草原』など。広大な土地の相続者であるクーパーは、一方では自然破壊を、もう一方では失われゆく大自然を惜しむ、という二面性を持つといわれる。

4. 1830年代から1860年代（南北戦争直前）

ウィリアム・エラリー・チャニング ポストンのユニテリアン教会牧師。カルヴィン主義を批判し、人々を神の厳しい掟から解放した。彼は理神論を展開し、続く超絶主義者たちに道を開いた。ラルフ・ウォルド・エマソン『自然論』、『アメリカの学者』、『神学部講演』、『代表的人物論』など。ポストンの伝統を誇る教会の牧師を辞任。超絶主義者として、「自然と神と人間が究極的には同じ」という考えを表明した。晩年はコンコードの聖者として尊敬される。ヘンリー・デービッド・ソロー『森の生活』など。エマソンの家の近くで生まれ、彼の超絶主義の影響を受ける。『森の生活』のような思索的生活を送った後は、奴隷制度を認める当時の政府を批判し、「市民としての抵抗」を表明する。ウォルト・ホイットマン詩集『草の葉』が代表作。『草の葉』は、エスマンの提唱するアメリカの知的独立と個人の尊厳を基に、アメリカの現代さらに未来を謳歌したもの。エドガー・アラン・ポウ短編『黒猫』、『黄金虫』、長編『アーサー・ゴードン・ビム』、詩『アナベル・リー』、『ユリイカ』など。想像力を駆使して、創作の世界に、恐怖、戦慄、美をもたらしたといわれる。彼の詩や小説は、フランスの象徴派詩人たちに大きな影響を与えた。ナサニエル・ホーソーン『緋文字』、『トワイイス・トールド・テールズ』など。ハーマン・メルビル『白鯨』など。人間を歪める文明や、人間の尊厳を損なう社会体制、神が善と悪の二面性を与えたことへの不審と怒りから、創作を進めた。彼の作品が評価されるのは死後であった。

5. 1860年代から19世紀末まで（南北戦争とアメリカ資本主義の興隆）

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』、『ハックルベリー・フィンの冒険』など。ミシシッピ河畔に育ち、長じて印刷工、水先案内人、地方新聞記者などを経て、文壇に登場、成功をおさめる。自分の生きている時代を「金ピカ時代」と評した。ウィリアム・ディーン・ハウエルズ『サイラス・ラバムの良心』など。トウェインや地方作家の外面的リアリズムと、次代のヘンリー・ジェイムズの内面的リアリズムの中間に位置する文学の手法を展開。長く有力文芸誌の編集に携わり、後輩の育成につくした。ヘンリー・ジェイムズ『ある婦人の肖像』、『使者たち』、『黄金の盃』など。6歳の時からヨーロッパ旅行に出かける。成人する頃には、ヨーロッパとアメリカとで交互に生活。小説家志望の彼は、創作家として土地

に根をおろす重要性を意識していたが、ヨーロッパは祖国アメリカよりも彼を魅きつけた。ロンドンに住み、次々と作品を発表するかたわら、アメリカからくる作家の卵にも手を差し伸べた。死の直前、イギリスに帰化。ヘンリー・アダムズ『アメリカ合衆国史』、『ヘンリー・アダムズの教育』など。民主主義の危機と価値観の変動の時代に当って、啓蒙派の文学者、歴史家の道を歩んだ。地方色の作家たち—南北戦争後、地方の特色を文学のテーマにした文学がでてきた。これは、辺境が持つ力をなし崩し破壊する都市化と、中央集権化に対抗して、地方の文化をリアリズムの姿勢でとらえ記録しようとしたもので、理想化された田園の賛美とはほど遠く、地方のもつ取り残された喪失感、無力感を強く出している。

6. 19世紀末から20世紀初頭（1890年—1910年代）

自然主義の作家たち—スティーブン・クレイン『街の女マギー』、『怪物』など。テーマに資本主義の冷酷さと貧しさに非力な人間の悲惨さをとりあげる。フランク・ノリス『マクテューブ』、小麦三部作『オクトバス（たこ）』、『小麦取引所』、『狼』。資料収集中、急死のため『狼』は未完。フランスの自然主義作家ゾラの影響を受ける。一方、編集者として、ドライザーの『シスター・キャリー』の価値を認め出版させるなど、文学の発展に貢献した。セオドア・ドライザー『シスター・キャリー』、欲望三部作『財界人』、『巨人』、『克己の人』、『アメリカの悲劇』など。アメリカの自然主義文学を確立し、20世紀のアメリカ文学の基礎を築いた、と評価される。シャーウッド・アンドソン『オハイオ州ワインズバーグ』、『貧乏白人』など。年代的には、マーク・トウェインと現代作家の中間に属し、近代化の洗礼を受ける前の、素朴な中西部の感覚とあわせて、シカゴ・ルネッサンスの新しい感覚にも興味を示した。次代の作家に大きな影響を与えた作家の一人。シンクレア・ルイス『メイン・ストリート』、『バビッド』など。アメリカ文学者の中で、最初のノーベル文学賞受賞。アメリカ現代文学の基礎を築いた一人。

7. 1920年代の作家たち

第一次世界大戦後の作家たち—フランシス・フィッツジェラルド『楽園のこちら側』、『偉大なるギャッツビー』など。アーネスト・ヘミングウェイ『日はまた昇る』、『武器よさらば』など。ジョン・ドス・パソス『三人の兵士』など。ウィリアム・フォークナー『サートリス』、『響きと怒り』など。トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』、『時と川について』など。

新しい詩人たち—エドガー・リー・マスターズ『スプーン・リヴァー・アンソロジー』など。エドウィン・アーリントン・ロビンソン『ザ・マン・アゲインスト・ザ・スカイ』など。

「外国文学」講義録 (4)

エズラ・パウンド『版画』、『詩篇(カントーズ)』など。T.S.エリオット『荒地』、『四つの四重奏』など。ロバート・フロスト『ボストンの北』、『証の樹』など。ウォーレス・ステイブンス詩集『ハルモニウム』など。ウィリアム・カルロス・ウィリアムズ『ペイターソン』など。E.E.カミングズ詩集『チューリップス・シムニーズ』など。ハート・クレイン詩『ブリッジ』など。

演劇—ユージン・オニール『カリブ島の月』、『地平線の彼方』、『毛猿』、『楡の木陰の欲望』など。エルマー・ライス『街の風景』、『計算機』など。

8. 1930年代から1940年代

アースキン・コールドウェル『タバコ・ロード』、『神に捧げた土地』など。ジョン・スタインベック『二十日ねずみと人間』、『怒りの葡萄』など。ウィリアム・サロイヤン『空中ブランコに乗る勇敢な若者』、『我が名はアラム』など。ヘンリー・ミラー『北回帰線』、『南回帰線』など。ナサニエル・ウェスト『パルソー・スネルの夢の生活』、『いなごの日』など。ジョン・オハラ『サマーら〔ラ〕の町で会おう』など。ジェイムス・T・ファレル『若きロニガン』、『審判の日』など。ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム』。アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘はなる』。ドス・パソス『U.S.A.』、三部作—『北緯42度線』、『1919年』、『ビッグ・マネー』。

演劇—マクスウェル・アンダスン『ウィンターセット』、『上院下院』など。シドニー・キングスレイ『白衣の人々』、『デッド・エンド』など。ポール・グリーン『アブラハムの胸』など。ソートン・ワイルダー『我が町』など。クリフォード・オデッド『レフティを待ちつつ』、『月へのロケット』など。リリアン・ヘルマン『子供の時間』、『子狐たち』など。

9. 第二次世界大戦後の文学 (1940年代後半から1950年代)

戦争小説—ノーマン・メイラー『裸者と死者』。ジェイムズ・ジョーンズ『地上より永遠に』。ハーマン・ウォーク『ケイン号の反乱』。ジョン・ハーシー『アダノの鐘』、『ヒロシマ』など。ジェイムス・ミッチナー『トコリの橋』。

南部の作家—カースン・マッカーズ『心は孤独な狩人』、『結婚式のメンバー』など。トルーマン・カポーティ『遠い声、遠い部屋』。フラナリー・オコナー『賢い血』。

黒人作家—リチャード・ライト『アメリカの息子』、『アウトサイダー』など。ラルフ・エリスン『見えない人間』。ジェイムズ・ボールドウィン『山に登りて告げよ』、『ジョバンニの

部屋』、『もう一つの国』など。

既成作家たち—アーネスト・ヘミングウェイ『老人と海』、『移動祝祭日』、『海流のなかの島々』。ジョン・スタインベック『エデンの東』、『怒りの葡萄』。ヘンリー・ミラー『サクセス』、『ネクサス』。

ユダヤ系作家—ソール・ベロー『オーギー・マーチの冒険』、『雨の王ヘンダーソン』、『ハーツォグ』、『サムラー氏の遊星』など。フィリップ・ロス『さようならコロンバス』。ジェームスD.サリンジャー『ライ麦畑で捕まえて』。

その他—ウィリアム・スタイロン『闇の中に横たわりて』。

演劇—テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』、『欲望という名の電車』、『バラの刺青』、『熱いトタン屋根の上の猫』。アーサー・ミラー『セールスマンの死』、『るつぼ』、『橋からのながめ』。ウィリアム・インジ『帰れ、愛しのシバ』、『バス・ストップ』。ユージン・オニール『氷人来る』。

10. 1960年代から1970年代

第二次世界大戦後の国際世界は、アメリカと旧ソ連の対立による冷戦の展開にはじまり、新しい国家の誕生と第三世界の台頭による旧植民地と元宗主国の対立などと、新しい動きをみせた。アメリカは西側の要として、共産主義の浸透を防ぐことに力を注ぎ、ベトナム紛争に介入し、全面的な戦争に拡大させた。国内では、公民権運動の高まりや、ベトナム戦争の拡大に反対する運動も盛んになった。若者たちは、既成の体制に反撥して、アンチ・カルチュアを求めた。この状況の下で、文学界では目まぐるしい社会変化や価値観を伝統的な小説手法ではとらえることが不可能であると、新しい手法を求める動きが盛んになった。そこで生まれたのが、人間の存在を超えたものに対する虚無感から、事実の誇張やパロディ化を進め、途方もないような物語を作り上げるブラック・ユーモアであった。さらに、別の動きとして、作者の主観を排して、事件や出来事の方に読者を立ち合わせ、ありのままの姿や、背景にある時代意識を、直接に伝えようとするニュー・ジャーナリズムといわれる手法が生まれた。また、現実とは意味をなさないバラバラなものの集まりにすぎない、という考えに立ち、作者の主観を前面に押し出し、小説は「こしらえもの」、いわゆる虚構のものだという意識で、現実をそのまま写し出すことを徹底的に排除しようとするニュー・フィクションが出現した。(参考別府恵子ほか『アメリカ文学史』pp.182-3, ミネルヴァ書房1989年版, 新版2000年版。)

ユダヤ系作家—ジェロームD.サリンジャー『フラニーとズーイ』、『大工たちよ、屋根の梁を高く上げよ』、シーモア・序章』。フィリップ・ロス『ポートノイの不満』。ノーマン・メイ

ラー『バーバリの岸边』、『鹿の園』、『ぼく自身のための広告』、『アメリカの夢』、『なぜ僕らはヴェトナムへ行くのか』。ベルナルド・マラマッド『魔法の樽』、『アシスタント』、『もう一つの生活』、『フィクサー』。

ビート派作家—ジャック・ケルアック『路上』、『禅ヒッピー』。

その他の作家—ジョン・アップダイク『走れウサギ、走れ』、『ケンタウロス』、『カップルズ』。ジョイス・キャロル・オーツ『彼ら』、『愛の車輪』。ジョゼフ・ヘラー『キャッチ22』。トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』、『冷血』。ケン・キージー『カッコウの巣』。ウラジミール・ナボコフ『ロリータ』、『アーダ』。ジョン・バース『氷上オペラ』、『路の果て』、『タバコ商人』、『山羊少年ジャイルズ』。

ニュー・ライターズ—トマス・ビンチョン『V.』、『競売ナンバー49の叫び』。ドナルド・バーセルミ『帰っておくれ、ガリガリ博士』、『白雪姫』、『都市生活』。ウィリアム・バロウズ『裸のランチ』。カート・ヴォネガット『母なる夜』、『ローズウォーター氏に神の祝福を』、『屠殺場5号』。

ブラック・パワー系—イシュメル・リード『自由な葬儀人足』。ウィリアム・H・ギャス『アメリカの果てに』。ロナルド・スーキニック『小説の死』。

詩人—セオドア・レトキ詩集『目覚め』、『風に向かっての言葉』。エリザベス・ビショップ『詩集—北と南、冷たい春』。アレン・ギンズバーク詩集『吠える』、『キャディシュ』、『変化』。シルヴィア・プラス詩集『エアリアル』。

演劇—エドワード・アルビー『ヴァージニア・ウルフなんか怖くない』。ニール・サイモン *Come Blow Your Horn, Bare Foot in the Park, The Odd Couple, The Star-Spangled Girl, Plaza Suite, Last of the Red Hot Lover*。ジェイムス・ボールドウィン『チャーリー氏のためのブルース』。テネシー・ウィリアムズ『イグアナの夜』。

11. 1970年代以降

70年代以降、経済の低迷で国内的に停滞的な傾向が続く。やがて、80年代にレーガン政権が登場すると、財政赤字の削減が推し進められる。そのなかで、政治に対する不審が高まり、保守主義の台頭の下、都市風俗では「ミーイズム」の流行や、ヤッピー族の出現がみられる。文学の世界では、60年代の文学の中心であったニュー・ライターズの動きも、現実に対する取り組み方が複雑になり、多様化をみせる。また、保守的な世相を反映して、ニュー・リアリズムといわれるグループが出てきた。そうした若手作家の動きと平行して、ジョン・アップダイクの『ウサギ』シリーズ、フィリップ・ロスやソール・ベローたちの変らない創作意欲もさかんになった。注目されるのは、二人の黒人女性作家の登場である。一人は、『青い目

がほしい』のトニー・モリスン、もう一人は、『カラーパープル』のアリス・ウォーカーである。新しいリアリズム小説が読まれるにつれて、極度に短い短編が出てきた。称して『ミニマリズム』と呼ばれる。さらに、リアリズムに対して批判が起こり、現代社会あるいは都市を描くには、新しい手法や方向性が必要だ、と考える若手作家たちがでてきた。ポール・オースター、ウィリアム・ギブソン、スティーブ・エリクソンたちである。80年代に入ると、50年代にユダヤ系作家が登場したように、ネイティブ・アメリカンやアジア系の作家が登場する。このようにして、アメリカ文学はその懐を広げて、多様な民族出身の作家たちが表現の場を広げていく。(参考 福田陸太郎ほか『アメリカ文学思潮史』pp. 459—471。)

ニュー・ライター系—トマス・ピンチョン『重力の虹』、『ヴィインランド』。カート・ヴォネガット『チャンピオンたちの朝食』、『青ひげ』など。ドナルド・バーセルミ『罪深き愉しみ』、『パラダイス』など。ジョン・バース『キメラ』、『サバティカル』など。

若手作家たち—ポール・オースター『ガラスの都市』、『最後の者たちの国で』など。スティーヴ・エリクソン『彷徨う日々』。

ユダヤ系作家—レイモンド・カーヴァー『大聖堂』、『僕が電話をかけている場所』など。ソール・ベロー『学生部長の12月』。フィリップ・ロス『解き放たれたザッカーマン』など。ノーマン・メイラー『死刑執行人の歌』、『女性とそのエレガンス』、『古代の夕べ』。

アジア系作家—マクシン・ホーン・キングストン『チャイナタウンの女武者』など。エイミ・タン『ジョイ・ラック・クラブ』。

アフロ・アメリカン系作家—アレックス・ヘイリー『ルーツ』。リス・ウォーカー『メリディアン』、『カラー・パープル』など。トニー・モリスン『青い目がほしい』、『ソロモンの歌』、『タールベイビィ』、『ビラウド』など。

その他の作家—ジョン・アーヴィン『ガープの世界』、『ホテル・ニューハンプシャー』、『メアリー・オウエンに祈りを』など。ジョン・アップダイク『帰ってきたウサギ』、『金持ちになったウサギ』、『さよならウサギ』、『イーストウィックの魔女たち』など。エドガー・L・ドクトロウ『ニューヨーク万国博覧会』、『ビリー・バスゲイト』など。ジョン・ガードナー『キングス・インディアン』、『オクトーヴ [バ] ア・ライト』など。ジョン・チーヴァー『短編集』。

女性作家—ジョイス・キャロル・オーツ『国境の向こう』、『ベルフロール』、『光の天使』、『マラヤ、一人の人生』など。アン・ビーティ『ラヴ・オールウェイズ』など。スーザン・ソントグ『エッセイ』『わたしのエトセトラ』、『隠喩としての病/エイズとその隠喩』。

演劇—アーサー・ミラー『世界の創造とその他のこと』。デイヴィッド・マメット『シカゴの性的倒錯』、『グレンギャリー・グレン・ロス』。エドワード・オルビー『海辺の風景』。ニール・サイモン『カリフォルニア・スウィート』、『ブライトン海岸のメモリー』。

詩—アレン・キンズバーク『アメリカの夜』。ガ[ゲイ]リー・スナイダー『亀の島』。シル

「外国文学」講義録 (4)

ヴィア・プラス『冬の木立ち』。A. S. マーウィン『エイシアン・フィギュア』。ジョン・アシユベリー『凸面鏡に映った自画像』。

(2002年12月現在のまとめ)

以上、2002-3年度「外国文学」講義録 (1), (2), (3), (4) でご紹介した参考資料すべては、私が日本の大学、大学院時代に集めたり、集まったりしたもの総てであり、そのほとんどはどこかの古本屋さんにもある。たとえば、東京経済大学図書館や第一研究センター・ロビーで、品川力氏を何回か見かけた。氏は、大学の近くに住む串田孫一氏が名付け親ときくペリカン書房の主人である。本郷三丁目、東大赤門前脇の路地を入ったところに在る。土間の店内は内村鑑三先生関係の本でいっぱいである。

父上は新潟柏崎で牛を飼いながら、内村鑑三を崇拜。長男には「力」(ダビデ)、次男には「匠」?(たくみ)、長女には「ヨブ」と、聖書からの名前をつけられた。今から40年ほど前から、品川力氏はホイットマン風のつばの広い帽子を白髪に載せて、一年中半袖シャツで、本郷の店から自転車をこぎながら、新宿、甲州街道の仙川にある桐朋大学(音楽)の図書館まで、たびたび通う。その都度、通路にある私の家に寄られ、何年もの間に私の本棚は氏からの古本でいっぱいになった。品川力氏は現在百歳ぐらい。

最も新しい参考文献は、友人たちが贈って下さった。例として挙げておく。

武田千枝子著『ハウエルズとジェイムズー国際小説に見る相互交流の軌跡』開文社出版2004年2月、266頁。

兒玉実英著『アメリカの詩』英宝社ブックレット、2005年、146頁。

山里勝巳、高山賢一、野田研一、高橋勤、スコット・スロヴィック共編『国際シンポジウム沖縄2003 自然と文学のダイアローグー都市・田園・野生』彩流社2004年9月、258頁。

(「韓国、台湾、日本の〈環境文学〉を考える詩人、作家研究者が文学と環境をめぐる白熱の討論!」)

15年前に、植木照代教授(神戸女子大学)がお一人で呼びかけられ創られた「アジア系アメリカ文学研究会」は、2004年9月、京都で国際フォーラムを開いた。スピーカーたちの講演目をあげておく。

“Asian American Literature in a Global Frame”

“Maxine Hong Kingston in a Global Frame”

“Asian American Literary Studies in Korea”

“Going Global: Reflection on Recent Asian British Fiction”

(2004年10月記)

次稿は、「外国文学講義録」(3) V. 『エディパス王』と「後記—私の歩み」, 『人文自然科学論集』No. 117, 2004年, pp. 57-134, 〈徳座晃子退職記年号〉中, 129頁で中断した〈(5) ミシガン大学大学院コミュニケーション学科へ〉の続きになる。(1)-(4)には, 以下の学位論文提出までの歩みに言及している。

学位論文

- 1955年3月 文学士“John Donne: In His Steps” 慶応義塾大学
- 1961年8月 M. A. in English “Rhetoric in Greco-Roman Education” ミネソタ大学大学院
- 1964年3月 文学修士“Ralph Waldo Emerson’s Theory of Arts” 慶応義塾大学大学院
- 1988年8月 Ph. D. in Communication “Oku Mumeo and the Effects to Alter the Status of Women in Japan from the Taishō Period to the Present” ミシガン大学大学院

- (1) 慶応義塾大学大学院文学研究科からミネソタ大学大学院英文学科へ
- (2) ミネソタ大学大学院スピーチ・演劇学科へ
- (3) 異文化社会への適応
- (4) ワシントン大学大学院スピーチ学科へ

(5) ミシガン大学大学院コミュニケーション学部へ

- 1. 古典修辞学から現代の「説得法」(Persuasion) へ
古典修辞学 スミス先生, スコット先生, ボーマン先生, イノス先生, マーティン先生, コルバーン先生, Gentlemen Scholars
- 2. 説得法/術 (Persuasion) ベアード先生, コルバーン先生, ラッカムでの講演会 (全米コミュニケーション学会歴代会長の紹介), オキーフ先生夫妻
- 3. 社会学 チェスラー先生, 社会学と私
- 4. マーティン先生 社会改良運動のコミュニケーション
- 5. 博士資格試験
- 6. 忘れえぬ人びと

(6) ヒューマン・コミュニケーション学教授法を学んで

- 1. 伝え合いとは
- 2. コミュニケーションのかたちと場
- 3. 教材の紹介
- 4. 参考資料 (言語学)

(2005年2月記)

